

## 大人もかかる夏かぜ

本康医院 本康宗信  
静岡薬剤耐性菌制御チーム

6～8 月には、例年夏かぜが流行します。夏かぜといわれる疾患では、手足口病、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱、伝染性紅斑が多くを占め、いずれもウイルス性感染症です。成人がかかると、小児より症状が強くてることがあり、注意が必要です。症状が強くなると、念のため抗菌剤としたくなる場所ですが、起因微生物がウイルスであると考えられるときには、抗菌剤の処方をおいとどまるようにしたいものです。

### 手足口病

手足口病では、小児よりも成人のほうが、症状が重くなりやすいことが特徴です。今年各地で手足口病の報告が増えており、静岡県でも全域で報告数が増えています(<http://www.pref.shizuoka.jp/kousei/ko-420a/documents/2019w30.pdf>)。水疱は、主に手の甲、手掌の側部、足の甲、足底の端部、後咽頭に見られますが、肘部、膝部、臀部に見られることもあります。水疱の痕は、痂皮にはならず、発疹の痛みは成人のほうが強く出ます。足底の皮疹では、歩きにくい程度の疼痛が見られることもあります。また、発熱は少ないと言われていますが、インフルエンザ様の全身倦怠感、悪寒、関節痛、筋肉痛などの症状が出る場合があります。皮疹については、単純ヘルペスとの鑑別が必要になる場合があります。今年、手足口病の流行年にあたり、保護者の方が罹患することもあります。原因となるエンテロウイルスのうち、コクサッキーA16(CA16)、CA6、CA10、エンテロウイルス71(EV71)などがありますので、複数回罹患することがあります。2018年に多くみられたエンテロウイルス(EV71)では髄膜炎を起こすことがあります。CA6が原因の場合、比較的大きい水疱が、広範囲に認められることがあり、治癒後数週間を経て手足の爪甲脱落症をきたす場合があります。流行年では成人でも、発熱の他に口内、手足の皮疹の有無、ご家族に手足口病に最近かかった方がいるか確認することも有用かもしれません。

### ヘルパンギーナ

ヘルパンギーナは、乳幼児に多く見られ、コクサッキーウイルスA群が原因で複数回罹患することがあります。手足口病と同様に県内で増加しています。まれに成人でも発症します。39℃以上の発熱の後、円蓋部に小水疱が出現し、数日ずつぶれて潰瘍になります。潰瘍の出現後、疼痛が強くなり、成人では小児より長く続くことが多く、1週間以上見られることもあります。単純ヘルペスによる水疱は、口腔内の前部(口唇、頬粘膜、舌、歯肉)に、ヘルパンギーナでは後部(扁桃前部、軟口蓋、口蓋垂)に認められます。小児では発熱、嚥下痛で発症しますが、年長児や成人では頭痛や筋肉痛で発症することがあります。

## 咽頭結膜炎

咽頭結膜熱は、アデノウイルスによって起こり、迅速診断キットにて診断を行う施設もあると思います。高熱と咽頭痛、眼瞼結膜の充血が起こるのが特徴です。家族内のタオルの共有で感染することが見られます。発熱、リンパ節腫脹、体重減少、脾腫など伝染性単核球症の症候を伴う場合には、急性 HIV 感染症も念頭に置く必要があります。

## 伝染性紅斑

小児では、両頬に紅斑が出ることからリンゴ病と言われます。パルボウイルス B19 によって発症し、感冒症状の後に、両頬が赤くなり、手足に網目状でやや盛り上がりのある発赤が認められます。成人では、発熱、関節炎を伴うことがあり、小児に比べて症状が顕著になります。関節リウマチ様の症状が出現し、リウマチ因子が陽性になることもありますが、関節リウマチの原因とはなりません。そのため不明熱の一因として鑑別診断に挙げられることも少なくありません。また、成人では、頬の皮疹は目立たず、四肢に腫れぼったさを感じ、入浴後に赤みが増すことが見られます。周囲に伝染性紅斑にかかった小児がいる場合には診断確率が高くなります。小児では頬の紅斑が出現する頃には、伝染性はありません。胎内感染するので、妊婦が罹患した場合には、産婦人科の先生とのご相談をお願いします。

## インフルエンザ

浜松市近辺では地域によっては、7 月に入っても小流行が見られています。インフルエンザは、熱帯地域では通年流行があります。沖縄では夏季にも流行があり、南半球では冬季にあたる現在、流行が見られます。例年南半球での流行の度合いが、日本での流行予測につながります。今年はオーストラリアでかなり大きい流行が見られており、今冬は注意が必要かもしれません。

(<https://www.smh.com.au/national/nsw/flu-season-begins-in-nsw-after-unprecedented-rates-of-summer-flu-20190520-p51p8s.html>)

沖縄ばかりでなく、東南アジア、南半球特にオーストラリアからの渡航者は夏休みに増えますので、インフルエンザ罹患者を診療する可能性があります。ラグビーワールドカップを 9 月に控えた今、渡航歴には、いっそう注意を払いたいものです。

これら感染症の予防には手洗いが大切です。特に家庭内に感染者がいる時、お世話をする前後で手洗いをするのを忘れないようにしましょう。また、タオルの使い回しをしないことも心掛けたいところです。インフルエンザ以外の上記ウイルスでは感染した後、症状が治まっても、4 週間程度は便からウイルスが排泄されることがあるため、トイレの後やおむつを替えた後の手洗いを治癒後も徹底することが必要です。

David Schlossberg: Enteroviruses 1177-1180, Acute and chronic parvovirus infection 1216-1219, Clinical Infectious Disease 2<sup>nd</sup> , Cambridge University Press 2015